

建築の歴史

国史館の建築は、日本統治時代に台湾総督府交通局通信部庁舎として使用されていたもので、森山松之助氏の設計により大正 13（1924）年に竣工しました。当時の通信部は、台湾全土における郵便、郵便貯金、郵便為替、郵便年金、簡易保険、電信及び航空監督とその計画業務に関する事項を担当し、当時の台湾における郵便、電信事業の最高主管機関としての役割を担っていました。

戦後、台湾行政長官公署交通処が総督府所管の交通事業を引き継ぎ、1945 年 11 月 1 日、郵電管理委員会を設置、接收業務を専管するとともに、通信部本来の事業を監督し、この建築内で業務を行いました。1946 年 5 月 5 日、郵便、電信事業を中央の帰属管理とするため、台湾郵電管理局を設立、1949 年には郵便、電信分離を開始し、郵政管理局と電信管理局がそれぞれ設立され、引き続き当庁舎で業務を行いました。その後、郵政管理局と電信管理局が移転してからは、交通部の主要庁舎として用いられるようになりました。1998 年 5 月 4 日、台北市指定文化財に指定されました。2006 年の交通部移転後は、総統副総統文物管理業務を推進するため、行政院の使用許可を経て、12 月 20 日、当建築物の管理機関として国史館が正式に登録されました。2010 年 4 月に国史館が当庁舎に移転、使用を開始しました。

本建築の特色：

一、耐震、防火の重視

関東大震災発生後、建築物の耐震、防火性がとりわけ重視されるようになり、本建築物の設計でもこうした概念が十分に反映されています。本建築物は U 字型の十分な敷地が確保され、各階の壁と天井は RC 構造となっており、建築物の高さも低く抑えています。

二、モダニズム建築の過渡様式

装飾の少ない建築外観で、緩い勾配のついた陸屋根をはじめとし、出入口は当時の官庁建築で主流だったポーチではなく、アーチトンネル型の表門を採用しています。モダニズム建築の要素を持ちながら、レリーフや渦形持送りといった細部の装飾には、古典建築の意匠をよく伝えています。本建築は、古典様式からモダニズム建築様式への転化期における代表的建築の一つです。

三、日本統治時代の先進設備

(一) 鉄製ウインドウシャッター：防火・防犯

西側に位置する事務室は、日本統治時代、重要文書を保管する場所でした。当時の窓枠は鉄製で、窓の外側には鉄製シャッターが取り付けられ、防火に高い効果を発揮しました。また、不審者と不審火の侵入を防ぐため、退勤後は下ろしたシャッターに鍵をかけることができました。

(二) 消防設備

この建物には、東西各1ヶ所、一階から三階まで室内消防設備が配置されています。当時の建築物の室内消防設備は、消火作業が水圧不足による影響を受けないよう、水道管と直結されていました。当時の総督府や鉄道部、専売局等にもこのような設備が配置されていました。

(三) 金庫

三階東側の空間には、扉の高さ181cm、幅90.5cm、厚さ15.5cmの大型金庫が四台設置され、重要文書や物品の保管に用いられました。壁に接した部分には通気口がつけられています。

(四) 電気時計

日本統治時代、総督府は時間の観念を普及させるため、多くの官庁の建築物の外に電気時計を掛けました。当時、本建築物の東側（博愛路側）にも、電気時計が掛けてありました。

総統と華僑

「総統と華僑」展示室には、華僑（Overseas Chinese）をイメージした O 形の円卓と C 形の座席があります。C 形の座席からは、憲法施行以来、歴代総統が接見した華僑と傑出華人の歴史的映像がご覧いただけます。O 形の円卓の上には、1931 年から 2009 年までの華僑に関する文書（28 件：国史館所蔵）や写真（72 枚：国史館所蔵）が展示されています。これらの史料から、広く知られている「華僑は革命の母」ということその他、華僑による抗戦支援や戦後復員、民主建設、台湾における発展、政府の華僑政策の推進といった、華僑の歴史がうかがえます。

日中戦争勃発前、中華民国政府は積極的に華僑から国内投資を取り付け、1938 年 10 月には、関連奨励法が公布されました。1948 年、蒋介石が 2,430 票の支持を集めて、憲法施行後初の総統に就任すると、華僑団体は次々と祝電を寄せました。1949 年、国民政府の拠点が台湾に移った際には、海外で積極的に反共工作を行いました。1952 年には、蔣経国氏が「中国青年反共救国団」を組織し、「華僑青年帰国軍中服務講習班」を実施しました。また同年 10 月 21 日から 307 名の各地華僑が北投の「僑園」に集まり、蒋介石総統司会による「第一回世界僑務会議」が開催されました。この会議では、毎年 10 月 21 日を「華僑の日」とすることが決議されると共に、国内外の華僑の連携と海外華僑組織の発展を図るため、「華僑救国聯合總會」という常設の機関が設置されることが決められました。1955 年 9 月 1 日、台北市の中山堂で「世界華僑文教会議」が開催され、華僑の文化教育問題について話し合いが持たれました。また華僑資本は、台湾経済の発展に大きく貢献しました。マンダリーナクラウンホテルやサンワールド・ダイナスティホテル、華僑銀行、世華銀行および数千社におよぶ大中小の華僑資本企業があります。

傑出華人には、日本プロ野球の王貞治や棋士の呉清源、林海峰、芸能人のジュディ・オング、三和株式会社社長劉秀忍、コレクターの彭楷棟、米国マラソンランナーの蒲仲強、著名作家の陳香梅、ワング・ラボラトリーズ創設者アン・ワング等がおり、それぞれ蒋介石、嚴家淦、蔣経国、李登輝、陳水扁総統と接見しました。

歴代総統が国交のある国との絆を深め協力関係の拡大に努めるために、訪問団を率いて訪問した際には、華僑から熱烈な歓迎を受けました。展示室には、関連資料の他、2008 年 3 月に馬英九総統が南太平洋で行った「太平洋友好の旅」でソロモン諸島を訪問した時に、空港で出迎えた華僑への感謝の意が展示されています。2009 年 5 月、中南米三国交国への訪問では、9 泊 9 日の「久睦の旅」を実施し、「活絡外交」を推進、ベリーズの華僑から熱烈な歓迎を受けました。6 月にパナマ共和国マルティネリ大統領の就任式典に参加した際には、華僑から防蚊・清涼効果のあるパナマシャツを贈られました。

当展示室のショーウィンドーには、各地の華僑から総統に献上された金牌、銀盾、銀塔、木刻、象牙細工、陶塑、織物、紫水晶、琥珀等 18 点の品々が展示されていますが、これらは華僑と国家の密接な関係を示すものと言えます。